

〈研究報告〉

看護大学生における低用量経口避妊薬に関する知識と意識

Knowledge and awareness of low-dose oral contraceptive by undergraduate nursing students

小島春佳¹ 朝澤恭子²

1 国立成育医療研究センター

2 東京医療保健大学 東が丘看護学部

Haruka KOJIMA¹, Kyoko ASAZAWA²

1 National Center for Child Health and Development

2 Division of Nursing, Faculty of Nursing, Tokyo Healthcare University

要 旨：目的：看護大学生男女の低用量経口避妊薬の知識と意識を明らかにする。

方法：量的記述的研究デザインであり、看護大学生男女 654 名に無記名自記式調査票を用いてデータ収集した。調査内容は低用量経口避妊薬の知識および意識であった。分析は t 検定，一元配置分散分析， χ^2 検定を行った。

結果：有効回答は 279 部（42.7%）であった。低用量経口避妊薬の知識は「含有成分」「内服期間」「副作用」の関する正答率が低かった。知識は異性との交際経験あり群、低用量経口避妊薬内服経験あり群、低用量経口避妊薬内服群が有意に高かった。低用量経口避妊薬の興味、偏見、使用希望といった意識は属性による差はなく、低用量経口避妊薬の知識も性別や年齢による差は確認されなかった。

結論：「含有成分」「内服期間」「副作用」に関する知識の定着の必要性と、従来通り男女同一の教育の継続が適切であることが示唆された。

キーワード：経口避妊剤、看護学生、意識調査、断面研究

Keywords：Contraceptives Oral, Students, Attitude to Health, Cross-Sectional Studies

I. はじめに

日本の若年妊娠において、2018年の出産数が8,700人であるのに対して¹⁾、人工妊娠中絶を選択するのは13,500人であり、中絶を選択する人が多い²⁾。若年妊娠では社会的・経済的などの理由から中絶を選択する人が多い³⁾。さらに、望まない妊娠をしてしまう背景には、避妊の徹底・知識不足や命の重たさの理解不足が指摘されている³⁾。

日本の大学生が最も選択している避妊法はコンドームであり、90%以上の大学生が使用している⁴⁾。コンドームの避妊失敗率は理想的な使用をすれば2%であるが、一般的な使用をすれば15%程度である⁵⁾。この避妊失敗率は決して低くない。それにも関わらず日本ではコンドームがメインの避妊法であり、中には膈外射精を避妊法としてコンドームと併用または単独で実施している人も少なくない^{7) 8)}。また、低用量経口避妊薬の低用量ピル（以下、ピルとする）の避妊失敗率は理想的な使い方では0.3%、一般的な使用で8%であり、コンドームよりも避妊に失敗する確率は少ない⁵⁾。低用量ピルは、卵胞ホルモンと黄体ホルモンが含まれた薬剤の内服により、排卵を抑制することで避妊する方法であり、最も避妊効果の高い方法の一つである⁶⁾。初回性交時に避妊を行わない人々は日本では29.6%、英国では21.0%、米国では24.7%である^{9) 10)}。日本は他の先進国に比べて避妊実行率が低い。また、その後の避妊法の選択に関して、ピルは日本では5.3%、英国は67.5%、米国は32.5%であり、コンドームは日本では78.9%、英国は23.3%、米国は33.0%である^{9) 10)}。日本ではコンドームの使用率は高いが、ピルを選択する人は少ない。このように、日本ではピルの利用率が欧米諸国に比べ格段に低いのが現状である⁶⁾。

日本における高校生から大学生を対象にしたピルに関する研究では、主に女性の生徒および学生を対象にしたピルの認識や知識、意識について明らかになっている。ピル認可前に行われたピルに関する研究では、男性は女性に比べてピル使用に積極的な傾向であり、女性は男性よりピルの作用・副作用に関する知識を多く持っている¹¹⁾。ピル認可後に行われた研究では、ピルの使用意向が認可前では14.6%であったものが、認可後は23.4%と増加していた¹²⁾。また、高校生対象の研究において、女子のピル使用意向が7.7%であるのに対して、男子は16.3%であることや、ピルの知識を持たない人が50%であることが明らかになっている¹³⁾。さらに、看護学生や助産学生、薬学部生を対象にしたピルに関する認識調査において、医療系学生に比較して一般学生は知識が低いことが明らかとなっ

ている¹²⁾。しかし、男性対象のピルに関する研究は羽入ら¹⁴⁾が2003年に大学生に行った意識調査以降見当たらず、男子看護学生などを対象にした研究も今まで見当たらない。

一方、男性看護師は2008年で約45,000人であったが2018年では約95,000人と2倍以上増加している¹⁵⁾。看護学生には男女を問わず、将来、看護師として勤務したときに避妊法に悩む対象者や家族計画の保健指導が必要な対象者と関わりを持つ可能性がある。その際に避妊法または月経困難症の治療としてピルが一つの手段であることを知り、知識や利用者の背景・気持ちの理解をした上で情報提供・ケアしていくことが大切であると考え。そこで、本研究は看護大学生に対する効果的な性教育の情報提供の示唆を得るために、看護大学生男女のピルにおける知識および意識を明らかにすることを目的とする。

II. 研究方法

1. 調査対象および期間：2016年7月から2017年9月に調査協力の得られた首都圏の看護系大学1施設に在籍する1～4年生654名を調査対象とした。

2. 研究デザイン：量的横断的記述研究であった。

3. 用語の操作的定義

1) 低用量ピル（以下、ピルとする）：低用量経口避妊薬のことであり、避妊や月経困難症の改善などを目的に生殖期の女性が服薬する薬剤である。

4. 調査方法：研究者が研究対象候補者に文書および口頭により研究の目的や意義、倫理的配慮等の趣旨を説明し研究協力の依頼をした。研究協力の了承が得られた後に研究対象者に対し、調査票、封筒を配布した。留め置き法を用いて調査票を回収し、調査票の回収をもって同意したとみなした。

5. 調査内容

1) 属性4項目は、性別、年齢、交際経験の有無、ピルの服用歴であった。

2) ピルに関する意識3項目は、興味、偏見、使用意向の有無であった。質問項目は木原ら¹¹⁾および久保田ら¹⁶⁾の文献を参考に研究者らが作成した。

3) ピルに関する知識は、含有成分、作用機序、服用頻度、内服期間、副作用の5項目であり配分各1点であった。「ピルに含まれている成分で正しいものはどれですか」「ピルの作用機序で正しいものはどれですか」「ピルを内服する頻度で正しいものはどれですか」「ピル内服は何日間の内服が正しいですか」「ピルの最も代表的な副作用

で正しいものはどれですか」の質問項目に対して選択肢は各5点あり、1点の選択で回答を得た。質問項目は松本ら¹²⁾の文献を参考に研究者らが作成した。知識は0～5点の範囲を取り高得点であれば知識が高いことを示し、ピルの知識得点とした。この調査項目を総合点として分析するにあたり、5項目1因子の信頼性と妥当性を本研究で確認した。

6. 分析方法

分析には統計ソフトSPSS ver.21を使用し、記述統計量を算出した。ピルの知識5項目は因子分析と信頼性分析を行い妥当性と信頼性を確認した。ピルの知識得点を従属変数とし属性がどのように関連しているかt検定および一元配置分散分析を行った。また、ピルの使用意向の有無と属性の関連を検討するために χ^2 検定またはフィッシャーの正確確率検定を用いた。

7. 倫理的配慮

研究対象者に対して、研究者が調査票配布時に、研究趣旨および目的について文書および口頭を用いて十分に説明を行った。調査の参加は対象者の自由意思であること、研究協力を拒否しても学業やその他の活動に不利益は生じないことを文章および口頭にて説明した。調査票は個人が特定できないように無記名とした。なお、東京医療保健大学ヒトに関する研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：28-14）。

Ⅲ. 結果

調査票は配布654部に対して回収361部（回収率55.2%）であり、そのうち有効回答279部（有効回答率42.7%）であった。

1. 対象者の背景（表1）

男性8.6%、女性91.4%であり、年齢は20歳が33.4%と最も多かった。また、異性との交際経験あり77.8%、過去に本人またはパートナーのピルの内服経験あり11.8%、現在、本人またはパートナーのピルの内服中3.6%であった。

2. ピルに関する意識および知識（表2）

「ピルに対する興味」を問う質問では、とてもある（6.8%）、ややある（25.8%）であり、32.6%の学生は興味が高かった。「ピルの偏見」を問う質問では、とてもある（0.4%）、ややある（20.8%）で合わせて21.2%の学生が偏見を持っていた。一方、ややない（18.3%）、とてもない（27.6%）で合わせて45.9%の学生は偏見が少なかった。「ピルの使用意向」を問う質問では、使用意向あり（16.1%）、使用意向なし（83.9%）であった。ピルの基礎的知識を問う質問では、

表1 対象者の属性(N=279)

項目	n	%
性別		
男性	24	8.6
女性	255	91.4
年齢		
18歳	40	14.3
19歳	65	23.3
20歳	94	33.7
21歳	61	21.9
22歳	14	5.0
23歳以上	5	1.9
交際経験		
あり	217	77.8
なし	62	22.2
ピル内服経験		
あり	33	11.8
なし	246	88.2
ピル内服中		
あり	10	3.6
なし	269	96.4

表2 対象者におけるピルの意識および知識 (N=279)

項目	n	%
ピルに対する興味		
とてもある	19	6.8
ややある	72	25.8
どちらでもない	115	41.2
ややない	36	12.9
とてもない	37	13.3
ピルに対する偏見		
とてもある	1	0.4
ややある	58	20.8
どちらでもない	92	33.0
ややない	51	18.3
とてもない	77	27.6
ピルの使用意向		
あり	45	16.1
なし（どちらでもない）	234	83.9
ピルの知識正答		
含有成分	87	31.2
作用機序	183	65.6
服用頻度	181	64.9
内服期間	36	12.9
副作用	67	24.0

「作用機序」の正答率が65.6%、「服用頻度」の正答率が64.6%であり、半数以上が正答していた。しかし、「含有成分」を問う質問では正答率が31.2%、「内服期間」の正答率は12.9%、「副作用」を問う質問の正答率は24.0%であった。

3. ピルに関する知識と属性の関連（表3, 4）

ピルの知識に関する5項目の総合得点を知識尺度

表3 ピルの知識尺度の信頼性と妥当性の検討 (N=279)

尺度	Mean	SD	負荷量平方和	項目数	因子負荷量	α 係数
ピルの知識	2.0	1.1	53.8	5	0.50-0.80	0.74

因子分析, 信頼性分析

として検討するために、信頼性と妥当性を検討した。因子分析は最尤法を用いた。因子負荷量は0.50以上、Cronbach's $\alpha = 0.74$ 、負荷量平方和は53.8%であり、信頼性と妥当性が確認された(表3)。これにより、ピルの知識尺度として活用できることが確認された。ピルの知識尺度得点を従属変数とし、属性が2群の場合はt検定を、3群以上の場合は一元配置分散分析で得点差を検討した。その結果、性別と年齢は有意な差が確認されなかった。交際経験あり群はなし群よりピルの知識得点が有意に高かった ($t(277)=3.0$, $p=0.003$)。ピル内服経験あり群はなし群よりピルの知識得点が有意に高く ($t(277)=5.5$, $p=0.000$)、ピル内服中群は内服していない群よりピルの知識得点が有意に高かった ($t(277)=6.4$, $p=0.000$)。

4. ピルに関する意識と属性の関連 (表4, 5)

ピルの意識として、ピルに対する興味およびピルに対する偏見は、属性による差は確認されなかった(表4)。また、ピルの使用意向も属性による差は確認されなかった(表5)。

IV. 考察

1. 本研究の対象者の背景

今回の調査対象者は、男性8.6%、女性91.4%であり、

表4 ピルの意識・知識と属性との関連(N=279)

属性	n	ピルの意識				ピルの知識	
		興味得点	SD	偏見得点	SD	Mean	SD
性別		t=0.8		t=0.5		t=0.5	
男性	24	2.8	0.9	2.4	1.1	1.9	1.1
女性	255	3.0	1.1	2.5	1.1	2.0	1.1
年齢		F=1.2		F=1.0		F=2.1	
18歳	40	2.8	1.3	2.4	1.0	1.7	1.1
19歳	65	2.8	1.1	2.5	1.2	1.8	1.1
20歳	94	3.1	1.0	2.5	1.2	2.2	1.1
21歳	61	3.2	1.1	2.6	1.0	2.0	1.2
22歳	14	3.2	1.1	2.1	1.0	2.0	1.3
23歳以上	5	3.2	0.8	1.8	1.1	2.8	0.8
交際経験		t=0.3		t=0.4		t=3.0**	
あり	217	3.0	1.1	2.5	1.1	2.1	1.2
なし	61	3.0	1.0	2.4	1.1	1.6	1.0
ピル内服経験		t=1.5		t=0.5		t=5.5***	
あり	33	3.3	1.2	2.4	1.0	3.0	1.1
なし	246	3.0	1.1	2.5	1.1	1.9	1.1
ピル内服中		t=0.6		t=0.2		t=6.4***	
あり	10	3.2	1.3	2.4	1.0	4.1	0.7
なし	269	3.0	1.1	2.5	1.1	1.9	1.1

t検定, 一元配置分散分析, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$.

女性が大多数を占めていた。過去に男女を対象に行われたピルの調査対象者は、男性41.0%、女性59.3%であった¹¹⁾。また、高校生366名を対象に行われた調査では男性47.0%、女性53.0%であった¹³⁾。男女を同等の人数で比較することが理想的ではあったが、今回は看護大学での調査であったため、女性が多く同等の人数を確保するのは困難であった。しかし、日本の看護師全体では男性看護師の割合が7.8%であり¹⁵⁾、それとほぼ同率の男性回答者の割合を確保できた。日本の看護職者男女比率と一致する対象者の男女比率であったといえる。

2. ピルに関する意識

ピルに関する意識および知識を男女の群間比較をしたところ、男女で有意な差が無かったため、従来通り男女同一の教育の継続が適切であることが示唆された。「ピルに対する興味」では、「興味がない人」、「どちらでもない人」を合計すると67.4%であり、多数を占めていた。外崎ら¹⁶⁾の大学生に対する調査では、ピルに関して「知らない」と回答した人は男性48.1%、女性33.7%であり、今回の対象者と興味の低さが類似していた。さらに、ピルの内服に対しに否定的な人が多く「副作用が心配」「経済的負担」が最も多い理由と報告されている¹⁶⁾。今回の対象者は看護学生であり、ピルの効能だけでなく副作用の知識があること、学生であり経済的負担があることも興味を持たない理由として推測される。ピル内服経験者が11.8%と少ないことも関心の低さに影響していると考えられる。

「ピルの使用意向」として、「どちらでもない」を含み「使用しない」を選んだ人が83.9%と大多数を占めた。亀崎ら¹⁶⁾の調査によると、低用量ピルをよく知っ

表5 ピル使用意向と属性との関連 (N = 279)

対象者の属性	n	意向あり		意向なし		χ^2	p-value
		n	%	n	%		
性別							
男性	24	3	12.5	21	87.5		0.613
女性	255	42	16.5	213	83.5		
年齢							
20歳未満	105	14	13.3	91	86.7	1.0	0.324
20歳以上	174	31	17.8	143	82.2		
交際経験							
あり	217	34	15.7	183	84.3	0.2	0.695
なし	62	11	17.7	51	82.3		

χ^2 検定, フィッシャーの正確確率検定

ていると回答した人は男性6.9%、女性5.1%であり、興味関心の低さは本研究と同様であった。高校生男女を対象とした調査では、「ピルの使用意向」として「使用する」、「使用しない」ではなく、「わからない」を選んだ人は50.7%であった¹³⁾。三島ら¹³⁾の調査対象者の年齢は15-18歳、本研究の対象者も18-23歳で平均年齢が19.9歳であったことから、ピルを現実的に使用する機会が少ないことが推測される。そのため、ピルの使用を身近に感じておらず「使用しない」を選ぶ人が多かった可能性がある。その理由として、大学生の性行為の体験率は46.0%と半数近くの人が体験しているが¹⁷⁾、日本では避妊法としてコンドームを選ぶ人が78.9%であることが¹⁰⁾、要因と考えられる。

「ピルの偏見」について、偏見が「とてもない」、「ややない」、「どちらでもない」が合計78.9%と多くを占めていた。医療従事者として作用機序などを理解していることにより、偏見を持つ人が少なかったことが推測される。

3. ピルに関する知識

ピルに関する基礎的知識のうち「作用機序」と「服用頻度」は正答率が高かった。これは2002年に薬学部的女子学生に実施した研究でも同様の結果であった¹²⁾。しかし、基礎的知識の「含有成分」、「内服期間」、「副作用」は正答率が低かった。これは松本ら¹²⁾の研究でも同様の結果であった。これらの知識は学生にとって定着しづらく、教育において強化する必要があることが示唆された。

また、ピルの知識においても、男女における差は無く、男性は自分が服用をする立場でなくとも女性と変わらない知識があることが分かった。これは、男女ともに同一の知識を付与される教育が行われている背景があると考えられる。また、ピルを過去・現在で内服したことがある人や、交際経験のある人はピルに関する知識得点が高かった。看護学生として、「将来、情報提供をする側であることを自覚し、勉強しておく」というよりも、「自身の生活で使う可能性がある」環境に置かれた人の方が、知識があった。自身の生活上の使用の有無に関わらず、情報提供をする側として知識を定着しておく必要がある。また、ピルの知識は年齢が上がるにつれて緩やかな知識平均点は増加していたが、有意差は確認されなかった。大学での学習経験より交際経験、ピル内服経験といった当事者の需要による知識への影響の強さが示唆された。久保田ら¹⁸⁾は、薬学部学生より助産学生の方がピルの知識が高く、受胎調節実地指導員の資格取得の学習経験によるものと報告している。このように、学習をどのように有効活用するかという学生の視点も知識定着に影響すると考え

られる。

本研究ではピルに対する偏見と知識に関連が認められなかった。HIVの感染経路の知識と偏見の研究において、知識が無いほど偏見が強いことが明らかになっている¹⁹⁾。知識が不足していると偏見に繋がる可能性もあることを推測していたが、本研究では明らかな関連が認められなかった。将来、看護師としてピルの情報提供を行う可能性のある看護大学生が、ピルに対して関心を持てるような教育が必要である。また、基礎的知識の「含有成分」、「内服期間」、「副作用」等のピルに関する知識の定着を目指す必要があることが示唆された。

4. 本研究の限界と課題

本研究は1施設を対象にした限定的な調査であったため、今回の結果を一般化するには限界がある。また、対象者における男性の割合が低かったため、今後は大規模に男性に対して調査を行う必要がある。回収率や有効回答率が低かったことは、若い男女に対して性に対する調査内容が多かったため羞恥心があったことが関係している可能性がある。

V. 結論

1. 看護大学生のピルの知識は、「作用機序」および「服用頻度」の正答率が高く、「含有成分」、「内服期間」および「副作用」の関する正答率が低かった。
2. ピルの知識得点は、交際経験あり群はなし群より有意に高く、ピル内服経験あり群はなし群より有意に高く、ピル内服中群は内服していない群より有意に高かった。
3. ピルの意識として、32.6%の学生はピルに対する興味が高く、21.2%の学生がピルに対する偏見を持っており、83.9%の学生はピルの使用意向がなく、いずれも属性との関連はなかった。

謝辞

本研究の実施にあたり、ご多忙中、協力を快諾くださいました対象者の皆様に深謝申し上げます。

引用文献

- 1) 厚生労働省. 平成30年(2018)人口動態統計(確定数)の概況. 2018;
検索日2020年3月23日, Retrieved from:
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai18/dl/gaikyou30.pdf>

- 2) 厚生労働省. 平成30年衛生行政報告例 (就業医療関係者) の概況. 2018;
検索日2020年3月23日, Retrieved from:
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/eisei/18/>
- 3) 望月善子. 10代妊娠の現状と問題点. 産婦人科治療 2005; 91(5): 496-501.
- 4) 炭原加代, 大橋一友. 大学生の性行動と性意識, 産婦人科治療 2005; 91(5): 510-515.
- 5) Trussell, J. Contraceptive failure in the United States. Contraception 2011; 83(5): 397-404.
- 6) 北村邦夫. OC/LEP剤がプレコンセプションケアに果たす役割. 地域医学2018;32(12):1057-1063.
- 7) 村口喜代. 未婚女性の避妊の現状ー初期人工妊娠中絶のアンケート調査よりー. 日本性科学会雑誌. 2002; 20(1):43-48.
- 8) 灘久代. 初産婦の婚前期における避妊意識と避妊法の選択. 母性衛生2005; 45(4):439-444.
- 9) Darroch JE, Frost JJ and Singh S. Teenage Sexual and Reproductive Behavior in Developed Countries: Can More Progress Be Made? Occasional Report, New York: The Alan Guttmacher Institute (AGI) 2001; No. 3. 1-120.
- 10) 日本家族計画協会, 「第2回男女の生活と意識に関する調査」報告書 2005;
検索日2016年5月10日, Retrieved from:
<http://www.aiiku.or.jp/~doc/houkoku/h16/6276011a.pdf>
- 11) 木原雅子, 木原正博. 経口避妊薬(ピル)についての知識・意識に関する全国横断調査. 日本エイズ学会誌 1999; 1:15-21.
- 12) 松本佳代子, 福島紀子. 女子薬学生の経口避妊薬(低用量ピル)の承認前後でのイメージおよび知識変容の分析. 母性衛生2002; 43(4):609-615.
- 13) 三島みどり, 高橋健太郎. 高校生における低用量ピルに関する意識の調査, 思春期学2002; 20(3):351-357.
- 14) 羽入雪子, 佐藤怜. 大学生の避妊および低用量ピルに関する意識, 日本赤十字秋田短期大学紀要2003; 7:53-59.
- 15) 厚生労働省. 平成 30 年衛生行政報告例 (就業医療関係者) の概況. 2018;
検索日2020年3月25日, Retrieved from:
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/eisei/18/dl/gaikyo.pdf>
- 16) 亀崎明子, 河本恵理, 倉重理歩. 大学生の緊急避妊薬および低用量経口避妊薬に関する知識習得状況ならびに低用量経口避妊薬の使用に関する意識. 母性衛生 2020;61(1):87-94.
- 17) 片瀬一男. 第7回「青少年の性行動全国調査」の概要. 日本性教育教会編. 「若者の性」白書. 初版 東京:小学館2013;9-24.
- 18) 久保田香織, 富永瑛子, 森崎沙織, 山口朋美, 皮野さよみ, 中野正博. OCに関する一般女子大学生、女子薬学部生、助産学生との認識の比較. バイオメディカル・ファジィ・システム学会年次大会講演論文集2010;23回:93-96.
- 19) 飯田敏晴, いとうたけひこ, 井上孝代. 日本の大学生におけるH I V感染経路に関する知識と偏見との関連ー性差に焦点を当ててー. 応用心理学研究2010; 35(2):81-89.